

ほんばこ



No. 71

日本教育会館 附設 教育図書館通信

復刊第71号 (通巻第87号)

2025年2月28日発行

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-6-2

日本教育会館5F

教育図書館

Tel/Fax : 03 (3230) 4437

Mail : toshokan32304437@jec.or.jp

<https://www.jec.or.jp/tosho/>

● 目 次 ●

- ◆ わたしが本を読む理由 山崎 卓也 2 ~ 3 p

- ◆ <<図書紹介>>
『暗幕のゲルニカ』 大澤 祐理子 4 p

わたしが本を読む理由

日本教職員組合 青年部長
山崎 卓也

本との出会い

「先生、うちの子は休みになるとゲームばかりで心配なんですよ。どうしたらよいですか？」

私が小学校で勤務していた頃、保護者からよく聞かれた言葉である。保護者との面談を夏休みや冬休み前に行っていたが、保護者は子どもの過ごし方を気にしている様子だった。そんなときは、決まって私は保護者に読書を勧めていた。「夏休み中に1冊でも読んで、子どもと本の感想でもお話する機会をもってはどうでしょうか。」と話した。私が国語の授業をされていて面白いと感じるのは「同じ文章を読んでいても、感じ方は人それぞれ違う」ということである。読書は子どもの想像力を育み、子どもたちの心を豊かにし、自由な発想を促していくためにも必要だと常々考えている。

近年はインターネットの普及から、活字離れがすすんでいると言われていることも多い。子どもたちは家に帰れば、ゲームや動画を見て過ごすことが多くなっているのが現実だろう。子どもの家での過ごし方の中でゲームや動画も悪くないと思うが、そこに読書という選択肢が減りつつあるように私は感じている。時代の流れと言ってしまうのは、そこまでののだが、なんだか寂しさを感じてしまうのは私だけだろうか。

私自身、小学校の頃は読書が好きではなかった。どんな本を読んでも面白いと思えることがなかったからだ。どちらかという

とグラウンドや体育館で走り回っていた子どもだった。中学校になると毎朝、読書の時間があった。読書が好きではない私にとっては、最初は充実した時間とは言えなかった。

しかし、あるとき、読書好きの友達が私に本を勧めてきた。『ダレン・シャン』だった。当時の私にとって『ダレン・シャン』は分厚い本で、読めるわけがないと思っていた。その友達に勧められるがままに読んでみると、1週間ほどの間に1巻を読み終えてしまい、自分でも驚いた。

『ダレン・シャン』は主人公の少年ダレン・シャンが奇妙なサーカスを見に行ったときのある出来事がきっかけで、バンパイアとなることとなり、旅をするお話である。ダレンは、友達の命を救うために、様々な試練に挑戦していくこととなる。バンパイアとして生きることは、決して楽なことではなく、多くの苦悩も描かれている。



『ダレン・シャン1 奇怪なサーカス』
著：ダレン・シャン 訳：橋本 恵
小学館

この本の面白さの一つとして、主人公ダレンが子どもらしい感情を素直に表現していく姿にあると感じた。「嫌なものは嫌、

やりたくないものはやりたくない」と言いながらも、友達のために自分を犠牲にする姿に心を打たれた。この本は「ダーク・ファンタジー」と言われており、明るく楽しく冒険する通常のファンタジーとはイメージが異なり、現実離れしたストーリーが私にはピッタリだった。

1巻を読み終えてから、毎朝の読書の時間はずっと『ダレン・シャン』を読むことになった。結果的に分厚いこの本を10冊以上読んだ。以前よりも読書の時間が充実し、楽しくなったのを今でも覚えている。その後はミステリーや探偵ものなどを読むことも増えた。今まで自分に合った本は何なのか自分自身でもよく分かっていなかったのだ。「どんな本に出会えるのか」ということは、本当に大切なのだと感じている。読書の楽しさを教えてくれた友達に感謝したい。

夏休みの前になると子どもたちに読み聞かせていた本がある。『のぶちゃんの戦争体験 富山大空襲』という絵本である。富山大空襲は地方都市への被害としては、当時最も大きかったと言われている。私が子どものときに、祖父は「富山大空襲のときは、富山市の空が赤くなっていた。当時は何が起こっていたのか分からなかったが、大変なことが富山にも起こっていたんやぞ。」と話してくれたことがあった。私も富山県の出身として、子どもたちには地元の戦争について学ぶことができるこの本を読み聞かせていた。この本は、当時11歳だったのぶちゃんがどのような体験をしたのか描かれている。

小学生の子どもたちにとっては、戦争について考えることは決して多くはないのかもしれない。しかし、毎年8月になると、

戦争についてメディアで取り上げている。子どもたちはそれをどのようにして見ているのだろうか。せめて、地元で起こったことを知った上で、戦争について考えてほしいと思う。

2025年は戦後80年の節目である。世界では、戦争や紛争が絶えることがなく、多くの人々が犠牲になっている。戦争を経験した方は当時の悲惨な状況から、「二度と戦争をしてはいけない」と心に刻んだ。日本でこのような思いをもった戦争経験者が減っていることはもちろんだうしようもないことではある。しかし、私たちはこの思いを受け継いでいくことはできる。本から考えさせられることは非常に多い。子どもたちにとって面白い本を読むことから読書を始め、実は読書によって多くのことを学んでいることに気付いてほしい。本は当時どのようなことが起こっていたのか、どのような思いだったのかを学ぶことができる。私はどのようなことを想像し、感じたのかは人それぞれ異なってよいことを子どもたちに伝え、本から学び、感じたことを大切にしてほしいと願ってやまない。



『のぶちゃんの戦争体験 富山大空襲』

文：瀬川 恵／絵：石黒 しろう

文芸社

【図書紹介】

『暗幕のゲルニカ』



著：原田 マハ
新潮社

子どもの頃、教科書でゲルニカの絵を見た。強烈な印象だったことを覚えている。「芸術は飾りではない。敵に立ち向かうための武器なのだ」本書の巻頭にはピカソの言葉が掲げられている。

2001年に起きたアメリカ同時多発テロを受けて、当時のアメリカ大統領はアフガニスタンの次の攻撃目標をイラクに定めていた。空爆前夜に国連安保理のロビーでパウエル国務長官が開いた記者会見の際、ロビーに飾られていた「ゲルニカ」のタペストリーに暗幕が掛けられていた。本書はこの事件をきっかけに史実に基づいて書かれた物語である。

物語は「ゲルニカ」をめぐる2人の女性の視点で書かれている。1人は実在の人物で写真家のドラ・マール。ピカソの恋人で「ゲルニカ」の制作過程を全てカメラに収めた。スペイン内戦中のパリで1937年頃から8年ほどをピカソと過ごしている。もう1人は架空の人物でニューヨーク近代美術館MOMAに勤務する日本人キュレーターの八神瑠子。同時多発テロで最愛の夫を失った。主に2003年のニューヨークという設定で、ピカソとその作品を愛してやまず、ある日ニューヨークの国連本部にあった「ゲルニカ」のタペストリーに暗幕が掛けられたことに衝撃を受け、その謎を究明するという役どころとなっている。

ゲルニカ爆撃と同時多発テロ、2つの悲劇が対置され、過去、現代を行き来する構成となっていて、史実と虚構を織り交ぜながら語られている。芸術によって人の心を動かし戦争を止められるかは未知数であるが、世界中の人々にピカソの思いを伝えるためメッセージを送り続ける。戦争やテロが背景にあるそれぞれの時代が、知的で勇敢な登場人物たちのこの命がけの働きによって繋がっているように感じられ、隔たりが無くなるように感じられた。

(大澤祐理子：中央労金一ツ橋支店)

教育図書館のご案内

《利用方法》

開館時間：午前10時～午後4時30分

開館日：(火)・(水)・(木)

閲覧：メールにて事前予約をお願いします。

✉ toshokan32304437@jec.or.jp

貸出：利用者カードの発行が必要です。
身分証明書をご持参ください。

(貸出冊数5冊 期間3週間)

レファレンス・サービス

当館所蔵の図書・雑誌、教育に関するお問い合わせはメールにてお願いいたします。

コピー：白黒1枚10円／カラー30円